

## 山陰労災病院60年の軌跡

豊島 良太

### 1. 労働者災害補償保険法の制定と労災病院の設立

戦前の労働者保護法は対象の職種や補償などが限定された、極めて不十分なものであった。戦後、民主国家を目指す政府は国の基盤の一つとして、適切な労働者保護の立法準備を進めた。昭和22年9月に労働者の基本的人権の確立を目指して、労働条件の最低基準を定めた労働基準法が公布、施行され、業務上の傷病に対する事業主の無過失賠償責任の理念が確立された。同時に、傷病を負った労働者を迅速かつ公正に保護し、併せて事業主の補償負担の緩和を図るため、新たに労働者災害補償保険法が制定された。この法律において、業務による傷病に対して補償するとともに、傷病者の社会復帰促進のための療養に関する施設等の設置及び運営を行うことが規定された。

これが労災病院の始まりで、労働省は昭和24年に日本製鉄八幡曾根診療所を引き取り、九州労災病院を設立した。その後、東京の日本医療団の永井病院、栃木の日本鉱業保養所を引き取り、東京労災と栃木肺診療所が開設された。

昭和26年には関西地区に設置が決まり、尼崎市や伊丹市、池田市が候補地として上がった。周辺事業所の多寡や敷地の地理的条件などから尼崎市に関西労災病院の開設が決定された。これが契機となり、全国の工業地帯や炭鉱、鉱山などの労働者の多い地域で労災病院開設の要望が高まった。その結果、昭和27年度予算で東北（宮城県）、東北労災秋田分院、熊本、昭和28年度予算で美瑛（北海道）、岩見沢（北海道）、福島、中部（愛知県）、岡山、中国（広島県）、山口、昭和29年度には九州労災門司分院、香川、愛媛、関東（神奈川県）、長崎、新潟などの建設が相次いで決定した（労働福祉事業団1998）。

### 2. 労災病院の米子への誘致

昭和29年頃、こうした労災病院設立ラッシュを目の当たりにして、鳥取大学医学部において米子市に労災病院設立の声が上がった。この声の主は、整形外科の西尾篤人教授（在任 昭和29-45年）で、九州と中国における相次ぐ設立が引き金になったものと思われる。西尾教授は「…教室が発展するためには密接に協力できる病院が必要と考えて、鳥取と鳥根の肢体不自由児施設、山陰労災病院の設立に努力しましたが、とくに太田巨君（筆者注 鳥大附属病院理学療法部初代技師長）のご協力には感謝しております」の文章を昭和54年発行の鳥取大学整形外科開講30周年記念誌に残している（西尾篤人1980）。

名前の上があった太田巨氏も同誌に「西尾先生のお供をして労災病院の誘致にあちこち歩いた23年余り苦しいことも多かったが出来上がった時の喜びは人には云えないものがあった」と語っている（太田巨1980）。

これを裏付けるように、山陰労災病院開設準備事務局のメンバーの一人であった新宮彦助第3代病院長は「設立誘致に際しましては、鳥取大学西尾教授（現・九州労災病院長）や鳥取大学太田巨先生、また元・自治大臣・故赤沢正道先生のひとかたならぬご尽力がありました」と山陰労災病院二十周年記念誌の発刊の言葉に記している（新宮彦助1984）。

ところが昭和27～29年のわずか3年の間に16労災病院の設立を決定したため、1病院当たりの予算は低額で、追加予算を必要としたため完成までに長年月を要することとなった。そのため30年度以降は1病院当たりの予算を増やし、短時日での完成開院の方針に変更された。このため新設の数は限られ、30年度に富山、筑豊、31年度には岩手、釧路、そして一旦新設ラッシュは落ち着き、昭和34年度に旭（愛知県）、昭和35年度に青森、大阪、霧島（鹿児島）が着工され、いずれも2年以内に完成した（労働福祉事業団1998）。

こうして全国の主要工業地域に病院設置がほぼ完了した状況にあって、米子市設立は格別の進展も見られず推移していたが、昭和34年鳥取県は米子市と共同して労働者及び労働福祉事業団に対して、労災病院の設置を要望した。労働福祉事業団では、昭和35年現地調査の結果、米子市皆生温泉に労災病院を設置することを決定した（山陰労災病院開院二十周年編集委員会1984 a）。昭和35年7月に至り、野坂米子市長、石破鳥取県知事、清水労働福祉事業団理事長、鳩川鳥取労働基準局長の四者間で覚書が交わされ、地元米子市は建設用地として一万坪を提供するとともに、これに附随した温泉の供給、水道の配管、電力並びに電話設置などに全面的に協力することとなった（山陰労災病院庶務課長1966）。

### 3. 山陰労災病院建築、開院準備

昭和37年1月19日に地鎮祭、起工式が行われ、直ちに建築に着手となった（中西實1963）。設計は建設省中国地方建設局管轄部により、工事は藤田組広島支店によって行われた。建設予算は349,203,000円、医療機械器具、什器等が64,726,000円と当時まとめられた開院式関係綴（山陰労災病院事務局1963）に記載されていた。

昭和38年1月、院長に石西進（前三井産業医学研究所長兼三井鉱山山形鉱業所病院長）が発令された。同年2月1日には労災病院開設準備事務局が設置されて事務局長に古浜理（前長崎労災病院事務局長）が発令され、準備が行われた。その一幕が初代薬劑部長吉積省三により「…山陰地方は鉱工業に恵まれないため労災という言葉になじみがなく、老災、労済などと笑えない文字で書かれたり、老人専門病院と間違えられたりしたものでした。最初は、鳥大近くの川魚料理店の「おほ江（大江）」の2階で、畳の上に長い座り机が並んだものでした。メンバーは、石西院長以下6名（古浜：事務局長、藤西：会計課長、福沢：外来係、逸見：庶務係、山田：庶務係、吉積：薬劑部長）で、新宮現院長は鳥大より出勤されていた。…3月1日より皆生の事務局長宅に移転し、やっと腰掛けて事務がとれるようになった。そして病院名も鳥取労災より山陰労災に変更となり、…」と語られている（吉積省三1984、6名の役職は山陰労災病院開院二十周年記念誌の「人事の変遷」（山陰労災病院開院二十周年編集委員会1984 c）を参考に追記した）。

病院名の変更については、開院直前の昭和38年3月20日の労働事業団社内報に「鳥取県米子市に目下新築中の鳥取労災病院は、4月1日から『山陰労災病院』と改称される」と記載されている（労働福祉事業団1963）。この内情について、初代事務局長古浜理は「当院は、始め鳥取労災病院として発足予定でしたが、山陰地方の労災病院は当院だけということになり、そんなら山陰労災病院にした方がよいと考え、本部の了承を得て現在の名目に変えました」と語っている（古浜理1984）。

そして病院は昭和38年4月に完成した。

### 4. 山陰労災病院開院

しかし、実際の開院は、資材や設備機器の搬入が間に合わず6月に遅れた。遅れた理由について、初代看護部長真野チエコは山陰労災病院開院20周年記念誌の看護部のあゆみに「…積雪のため資材搬入が不可能となり、4月開院がやむなく6月に延期されることになった」と記載している（真野チエコ1984）。実際、この年は1～2月に断続的な降雪と長期間の異常低温が続き、米子で約1mの積雪をもたらした38豪雪と呼ばれる大雪害があった年であった。

昭和38年5月9日、本館竣工検査が行われ、翌日建設省より病院へ移管となり、早速、藤西、福沢、吉積のメンバーで初当直をし、事務所も病院本館に移った（吉積省三1984）。昭和38年5月29日 厚生省収医第114号をもって使用の承認を受けた（山陰労災病院事務局1963）。

設置の条件の一つであり、売り物でもあった温泉については「米子市がボーリングをしましたが、遂に湧出せず断念せねばなりませんでしたが、私が一番頭を痛めたのはこの問題で、早速私の縁故の老人に相談したところ、幸いこの方が温泉会社の地元で唯一人の重役で、なんとかしようということで、開院4日前に温泉を導入することができました」と語って

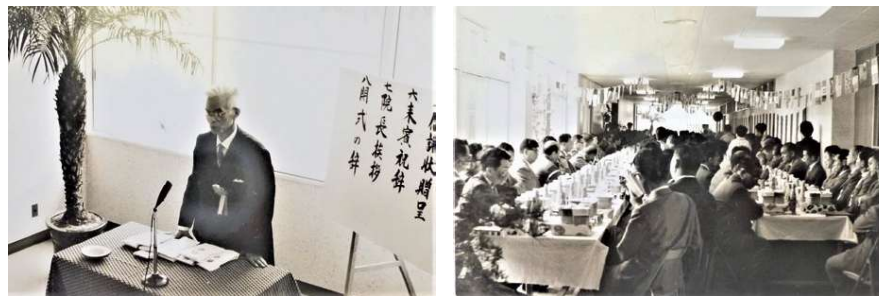


図1 昭和38年6月1日の外来待合での開院式

いる（古浜理1984）。

昭和38年6月1日に開院式が行われた。初代薬劑部長吉積省三の「当日は、中西理事長他200余名の来賓をお迎えし、…夜は東光園で宴会があり、…」(吉積省三1984)という述べのように、労働省、建設省、厚生省、会計検査院、鳥取県選出国會議員、中国地方建設局、地方労働基準局、工事関係者、鳥取県、鳥根県、米子市、鳥取大学、九州大学、医師会、歯科医師会、労災病院、雇用促進事業団、報道関係など多岐にわたる215名の招待者の出席を得て外來待合で盛大に挙行された(山陰労災病院事務部1963、図1)。

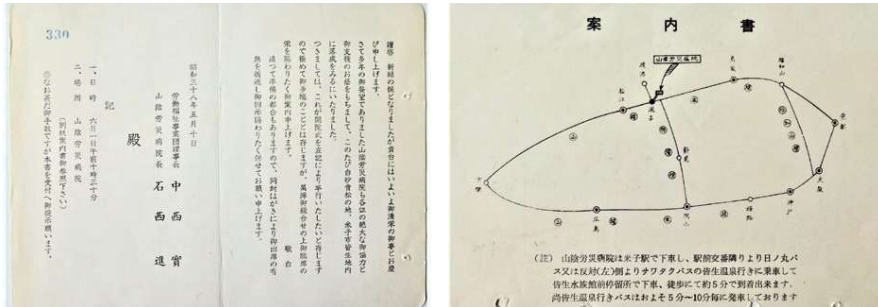


図2 山陰労災病院開院式の案内状と案内書

当時の案内状(図2)が残されており、その中に「案内書」(図2)と称した病院への交通経路案内が同封されていた。驚くべきことは、米子駅と皆生温泉間のバスがきわめて頻りに運行されていたこと、皆生水族館と称する施設のあったことである。その水族館は昭和32年から40年の間営業していたとのことである(皆生温泉ふるさと伝承HP)。

昭和38年6月5日 内科、外科、整形外科、皮膚泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、理学診療科の7診療科、病床数200床をもって診療を開始した(山陰労災病院開院二十周年編集委員会1984a、図3)。

病院は建設省中国地方建設局管轄部によって設計されたもので、建設省の昭和38年度全国建設設計コンクールにおいて、労災病院としての機能性と建物全体の風格及び色彩が当地の自然の美と調和しているとのことで、第1位最優秀作品に選ばれ設計者に建設大臣賞が贈られている(山陰労災病院開院二十周年編集委員会1984a、図4)。



図3 開院当初の北からの航空写真  
病院屋上に特徴的なサンルームが見られる。  
敷地内に数棟の職員宿舎が点在し、周りは松林と田畑であった。



図4 昭和38年度全国建設設計コンクールでの受賞  
東南から見た病院。

### 5. その後の変遷

医療需要の増加に応えるため、昭和44年から46年に第一次増改築工事を行い、本館東側に病棟と検査部、南側にリハビリテーション部などの諸施設を拡充し、308床に増床するとともに、放射線科、神経科、麻酔科、脳神経外科を新設した(山

陰労災病院開院二十周年編集委員会1984b、図5)。昭和52年に特殊健康診断部を発足し、有害業務従事者に対する診療体制の整備充実を図った。

昭和54年から59年にかけて第二次増改築工事を行い、既存部分の全面改修及び既存棟の東側に新本館(外來、病棟、人工透析センターの他、手術、放射線、検査、管理などの中央部門が入り、院内では東館と呼称した)を建築し、病院玄関を旧棟西側から新本館の東側に移すという開院以来の初の大規模模様替えを行った(山陰労災病院開院二十周年編集委員会1984b、図5)。その結果、昭和60年の病床は410となった。昭和57年に神経内科を、昭和60年に歯科を新設した。

この頃、国道431号線の皆生大橋の開通(昭和60年8月)や米子自動車道の整備(平成元年12月)により、病院周囲の商業化や宅地化が急速に進み、病院へのニーズが多様化し、地域中核病院として担うべき役割が増してきた。

平成2年に心臓血管外科を設置し、循環器疾患に対する診療体制を強化した。これにより当院の5本の柱である中枢神経、循環器、消化器、腎代謝、骨関節の診療体制の基礎ができた。

平成7年から8年にかけて中規模の第三次増改築工事を行い、新本館の東側に外來棟及び病棟を拡張し、勤労者医療の充実とともに、患者アメニティーの向上と地域病診連携部門の充実を図った(図5)。

平成13年に新本館の北側に救急センターを増築し、救急医療体制の整備を図った。平成20年には、旧棟の3階に重症患者管理のための集中治療室8床と救急入院専用病床20床を新設し、383に減床した。平成22年8月には、集中治療室を高次集中治療室(HCU)に名称変更した。

平成25年から平成26年にかけて小児科、産婦人科の開院に伴う南棟の増築及び第2放射線棟、第1エネルギー棟を増築した。



図5 平成10年の東南方向からの航空写真  
一次(緑線から青線)、二次(青線から黄線)、三次(黄線から東側)増改築での新築部分、3段階を経て東へ伸びていった。

### 6. 機能整備とIT化

病院IT化計画により平成20年4月に医療情報システムを導入した。まずオーダリング、次いで画像配信、電子カルテと順次整備し、平成21年4月から全面稼働となった。

### 7. 再開発

西側の旧棟は昭和38年、一次増築部分は昭和45年そして東側の本館は昭和59年の竣工であったため、病院の老朽化は著しく、数次にわたる増改築のため動線は複雑となり、平成20年頃より再開発を求める声が高まってきた。

旧棟と本館(東館)の南側に全面的な新築が計画され、平成30年2月より旧棟南側の建物の撤去と敷地整備が始まり、その空いた敷地に令和元年6月から建築が始まった。令和3年1月に新病院西側部分として竣工し、一般病棟やHCU、外來、それに加えて手術部や材料部、



図6 南から見た令和3年竣工の新病院西側部分と後方の日本館

## 病院の沿革と概要

検査室、画像センターなどの中央部門が配置され、同年3月より運用を開始した（図6）。

続いて、東側の本館南側の既存建物の撤去と敷地整備が行われ、令和4年4月に新病院東側部分の建設が始まり、令和5年6月に竣工した（図7）。これによって入院病室はすべて新病院に移った。これら一連の建築工事において、設計は伊藤喜三郎建築研究所、工事は奥村組、中電工、岡田電工、解体は懸樋工務店などによって行われた。

完成した新病院は東西約108m、南北41m、延べ面積約2万平方メートル、6階建てで、3～6階には、東西に1病棟ずつ、HCUを含めて合計8病棟を設け、病床は377から363に減らし、個室を増やして、4人部屋についてもベッド間隔を広げ、療養環境の改善を図った。また、感染症対策として陰圧室を個室17部屋、4人部屋1室を用意した。

病棟の診療科編成は、各病棟とも複数科の混在とした。コロナの病棟内クラスター発生時に新規入院の停止を経験したため、感染症の病棟内発生時の入院受け入れ停止のリスクを軽減するため、各科ごとに複数の病棟を設定した。

北側の残った旧棟や施設を取り壊し、最後に新病院北側の玄関や外構、駐車場工事をを行い、令和7年7月に全工事完了の予定である。



図7 東南から見た令和5年6月竣工の新病院  
後方に日本館の一部が見られる。

## 新病院紹介

### 参考文献

太田亘(1980)「翔んで翔んで30年」、『鳥取大学整形外科開講30周年記念誌』102頁、開講30周年記念業績集編集委員  
皆生温泉ふるさと伝承

< [https://office-beans.co.jp/wp2/wp-content/uploads/2021/12/2\\_3.pdf](https://office-beans.co.jp/wp2/wp-content/uploads/2021/12/2_3.pdf) >

閲覧日: 令和5年8月23日

山陰労災病院開院二十周年編集委員会(1984a)「沿革」、『山陰労災病院開院二十周年記念誌』27頁、山陰労災病院  
山陰労災病院開院二十周年編集委員会(1984b)「病院の概要」、『山陰労災病院開院二十周年記念誌』33-40頁、山陰労災病院  
山陰労災病院開院二十周年編集委員会(1984c)「人事の変遷」、『山陰労災病院開院二十周年記念誌』117-131頁、山陰労災病院  
山陰労災病院事務局(1963)「開院式関係綴」  
山陰労災病院庶務課長(1966)「労災病院めぐり 山陰労災病院の巻」、『労働福祉』17(6)、32-37頁、労働福祉共済会  
新宮彦助(1984)「二十周年記念誌発刊の言葉」、『山陰労災病院開院二十周年記念誌』1-2頁、山陰院労災病院  
中西賢(1963)「労働福祉事業団理事長開院式式辞」、『開院式関係綴』山陰労災病院事務局  
吉浜理(1984)「開院20周年を祝して」、『山陰労災病院開院二十周年記念誌』155頁、山陰院労災病院  
西尾篤人(1980)「米子の思い出」、『鳥取大学整形外科開講30周年記念誌』42-43頁、開講30周年記念業績集編集委員  
真野チエコ(1984)「看護部のあゆみ」、『山陰労災病院開院二十周年記念誌』87頁、山陰院労災病院  
吉積省三(1984)「開設準備事務所時代の思い出」、『山陰労災病院開院二十周年記念誌』158頁、山陰院労災病院  
労働福祉事業団(1963)「『山陰労災』と改称」、『労働福祉事業団社内報』昭和38年3月20日第20号、労働福祉事業団  
労働福祉事業団(1998)『労働福祉事業団四十年史』1-5頁、労働福祉事業団